

東急電鉄の非情に対して訴える

去る3月11日東日本を襲った自然の暴威は、その未曾有の規模と破壊力をもって地域の人々と社会に壊滅的な打撃を与えました。かてて加えて原発事故による放射能汚染という人災にも等しい二重三重に及ぶ災難の追い討ちです。その光景を多くの日本人は身を震わせ血を吐くほどの慟哭をもって見守ったことでしょう。

東日本大震災から7カ月を経ても国・自治体の復興支援が遅々としていて、又、東電の保障も遅れに遅れている中で、今日この頃、災害の傷跡から力強く立ち直ろうとする被災者達の元気な姿が見られるようになっております。その雄雄しさ、逞しさは真に賞賛に値します。

しかして、東日本大震災の悲惨さには比ぶるべきもないが、この東京の一角で長年住みなれた家を追われ、路頭に迷う苦境に追い込まれようとしている人々がいます。東急電鉄・大井町線高架橋下の住民達は2年前の夏、突然、東急電鉄(株)から契約解除・立ち退き通告がもたらされました。それも半年以内という仮借のない非情なものです。住民達にとってはまさに寝耳に水の事態でした。契約に関しては長年、自動更新されるのが慣わしだったからです。

**東急電鉄(株)は、
「高架橋の耐震補強工事を行うため」と言っている**

東急電鉄(株)の理由は、高架橋の耐震補強工事を行うにあたり高架下を占有している住民と住家が邪魔になると言っています。平成7年の阪神淡路大震災の後、国土交通省が、平成7年と13年の二度に亘って関係方面に耐震補強工事の通達を出しました。その要請に応えなければならないというものです。

**住民は
「終の棲家であり、忽ち路頭に迷う事態」**

古くは終戦直後から65年も住んでいる高架下住民に対し、東急電鉄はこれまで国交省の二度に亘る通達も、自らが賃貸借契約を解除し立ち退きを要求することになる情報も住民側に知らせてこなかったのです。そして或る日、突然の立ち退き通告です。長年平穩理に大家と店子と言う関係を築いてきた信頼関係を土足で踏みにじり、ふいの平手打ちを食らわせるような東急のやり口に、住民側が強く反発するのはいわば当然のことです。

立ち退きを迫られている多くの住民達にとっては今住んでいる場所が唯一、雨、風を凌ぎ日々の暮らしを平穩無事に紡ぐ命の綱とも頼む場所なのです。或いは店舗を構えて商う者にとっては暮らしと命を支える日々の糧を得る唯一の頼みの場所なのです。そこを何の手当てもなく立ち退かされれば明日からの生活の目途が立たず、忽ち路頭に迷う事態になりかねないのです。そういう現実に直面させられている住民達が東急の立ち退き要求をおいそれと呑める訳がないのです。精神的にも経済的にも生活再建のための時間が必要です。それ故10年といわず、せめて5年欲しいと言っているのです。それを東急は頑なに拒むのです。

